明日へつながる信頼の航跡

SEITOKU 盛徳海運建設株式会社

本社

企業概要

代表取締役
小田 徳彦氏

所在地　鳥羽市鳥羽四丁目2388-10
TEL:0599-25-3033　FAX:0599-25-6319
設　立　1969年（昭和44年）4月
資本金　2,000万円
従業員数　52人
事業内容　海運、土木建設工事請負、砂・砂利採取販売、石材採掘及び販売、果実の生産及び販売、農産物の加工・貯蔵及び販売
U R L　http://www.seitoku-net.co.jp/

「顧客満足の向上」「環境保護」の両立を目指し、誠意を持って優れた工事を提供する

全国を巡る「海のダンプカー」

盛徳海運建設株式会社は、三重県鳥羽市に本社を構え、建設工事の資材などの海上運搬・販売を主な事業とする会社である。一言で表すならば「海のダンプカー」だ。同社は、ガット船（砂、砂利、石材等の工事用資材を輸送する作業船）を7隻保有し、全国でもトップ5に入る事業規模だ。一番大きい船だと、3,000tを一度に運ぶので、陸上ダンプカーの約300台分になる。

同社は1947年に兵庫県姫路市家島町にて、小田徳彦社長の祖父・徳一氏が創業し、69年に株式会社として設立した。伊勢湾台風の復興支援で鳥羽へ来たことを機に、名古屋港の防潮堤の修繕などの基礎工事を請け負ったこともきっかけとなり、74年には鳥羽支店を設立することになる。82年には三重県建設業の許可を取得。86年に父・綾人氏（現会長）が社長となり、89年には鳥羽を本社として社屋を新設した。そして2013年に3代目として徳彦氏が社長に就任した。

海・陸一貫を目指して

SEITOKU-LINEの活躍するエリアを全国へ広げながら、多岐に亘る事業に取り組んでいる。海上運搬のほか、採石、土木、環境事業がある。尾鷲市に採石場を持ち、自然との共生や環境保全に配慮しながら良質な工事用石材を供給している。採石場からそのまま陸上運搬により海上運搬につなげ、土木施工を行う海陸一貫のシステムが、同社独自のハイスピード対応を可能としている。

ガット船は、最盛期には全国で1,000隻以上あったが、現在では300～400隻という状況である。淘汰される時代の中で、企業価値を高め続けてこら

れた理由は、現場での船員たちの誠実な仕事ぶりのおかげだと小田社長は語る。「皆が現場で一生懸命仕事をすることが、一番の営業になっている」と。

そして、同社の強みの一つに、「4点張り技法」という高い係船技術がある。海の所定の位置に船を着け、建設物の土台となる石材を正確に投入する。目標物が無く気象海象条件により変動が大きい海上での係船は、GPSがある程度の位置を示すものの、船員の確かな目測と乗船員のチームワークなしには不可能である。同社の船員だからこそなせる技であり、歴代の船員から継承されてきた貴重な技術である。次の世代に繋いでいくためにも、若手の人材育成には特に力を入れている。

基礎石投入

人材育成と働きやすい職場づくり

通常一隻の船は船長、機関長、クレーン操縦士など7～9人程で構成されている。生産性を考慮すると、業務の兼務も可能なベテランの船員のみを乗船させる方が良いが、同社の場合は乗船経験が少なく、海技士の資格を持たない者も乗船させている。その分負担は大きくなるが、小田社長は「資格の取得には現場経験が必要。一から育てることはコストがかかるが、当社独自の技術を継承していかなければならない。現場に行かせ、経験を積ませることが一番の教育法」だと話す。現場での緊張感は、乗組員の成長スピードを加速させているという。

また、現社長への代替わりを契機に、全船長を40代以下に担ってもらうよう若返りを図った。高校を卒業したばかりの若手船員とは親子のような関係になり、指導がしやすく、また指導を受けやすい体制となった。かつての船長はスーパーサブに徹してもらい、新船長のサポート役を務める。「世代交代を引き受けてくれたおかげで、盛徳の将来がつながった」と社長は話す。

船員は、2か月間の乗船後2週間の休暇という勤務体制となっている。長期間でもお互いが快適に生活できるよう、船員室にはWifiを完備し、船には珍しく個室ごとの快適な空調設備を整えるなど、個人のプライベート空間を大切にしている。一方で、家族以上にともに過ごす時間が長い船員同士のコミュニケーションを円滑にするため、若手が調理担当を担い、みんなで食事をとってもらうようにしている。若手船員の修行の一環にもなっているようだ。

常に船が出航しているため、社員全員が一堂にそろう機会はめったにないが、唯一年末には全員を集めて安全大会を開き、皆でレクリエーションをするなどして結束を高めている。社員の家族や縁のある人から、ぜひとも同社で働きたいと申し出があり、温かみのある社風が伺える。

災害復興支援から生まれたBCP対策

同社と災害とのかかわりは深く、伊勢湾台風による名古屋港の防潮堤の修繕にも携わっている。この復興工事がきっかけとなり兵庫から鳥羽へと本社を移転した経緯があるが、その後も阪神大震災、東日本大震災の発生時には、瓦礫や復興工事の石材の運搬を行ってきた。岩手県の宮古市では、漁港が瓦礫の集積所として利用され、サンマ漁を行うことができない状況にあった。そこで同社は瓦礫運搬を担った。瓦礫の受け入れ先が中々決まらないという事態に見舞われながらも、なんとか運搬を行い、サンマ漁を再開させることができた。

このような数々の復興工事を経験した同社であるため、防災や緊急時の事業継続（以後、BCP）に対する思いはひと際強い。海に面する本社社屋は海運業を営むには最高の立地であるが、防災的な観点では津波などのリスクにさらされやすい。支援を通した経験と被災企業の「高台があるなら、準備した方が良い」という声を受けBCP対策を強化している。本年の5月には、後述する「みのなる森　とこよの郷」にカフェとして営業する平屋を建設したが、有事の際には本社機能を移転できるような機能をもたせた。

とこよの郷ブルーベリー農園

豊かな発想力と「つながり」に支えられた新事業

近年は、環境事業にも力をいれている。2014年には太陽光発電事業、観光農園「みのなる森　とこよの郷」の開園と立て続けに新事業を展開した。同園は、的矢湾を臨む高台に立地し、ブルーベリー摘み体験などができるほか、カフェなどのスペースも充実している。老いも若きも「3世代の笑顔のきっかけづくり」をコンセプトとし、景色の良いところでおいしいものを食べていろんな話をして楽しんでほしい。一般の人にはなじみの薄い海運業を営む同社に対し、より身近なイメージをもってもらいたいという社長の強い思いから運営を始めた。もともと建設発生土を活用して造成された同園であるが、今後は園内で使用する電力エネルギーを自前で調達するなど、より一層の循環型社会を意識した施設となる予定だ。

これらアイデアは社長から発案されているが、地域や人とのつながりを大切にする姿勢が礎になっている。例えば、園内にある池は、友人の「気持ち良いけれど、少し乾いた感じがする」というちょっとした二言をヒントに社長自らの手で作られた。社長の豊かな発想力と、人とのつながりを大切にする人柄が、同社の展開する新事業の屋台骨となっている。

接岸する第三十八さだ丸

盛徳海運にしか頼めない

今後について「一番になるというよりは、オンリーワンですね。盛徳にしかできない分野を増やして、お客さまに愛され続ける会社を目指したい」と熱を込める。人材育成と更なる技術力の向上に力を入れていくとともに、リニア中央新幹線やセントレア沖合埋立工事などの国家プロジェクトに備え、本年7月には第五十七さだ丸を進水するなど、ハードとソフトの両面で強化を図っている。

そして、小田社長の豊かな発想力と地域の人とのつながりを活かし、新事業はますます広がりをみせる予定だ。

社員と地域がより幸せになれる会社を目指すことが、企業としての持続的な成長につながると、小田社長は確信している。

編＝会員事業部　奥田 千夏

支店より一言

岸壁で船体を大きく揺らしながら重い石材を受け止めるガット船の猛々しい姿にはいつも感動しています。対象的に小田社長はいつも冷静で柔和。災害復興や社会インフラなど国家プロジェクトを担う企業の代表者としての責任感や危険な作業に従事する従業員を思う繊細な感性をいつも強く感じます。「とこよの郷」景色最高です！ブルーベリージャム、美味です！一度ぜひお立ち寄りください!!

百五銀行 鳥羽支店長
奥田 光司